

# アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.196

April 2018

## “Electric City”, スケネクタディ

谷口明文

スケネクタディを最初に訪れたのは2001年のことだったと思う。モホーク族の言葉に由来する奇妙な呼称をもつこの町に向かった目的は、1887年にトーマス・エジソンがエジソン・マシン・ワークスをこの地に移し、1892年にはゼネラル・エレクトリック（GE）社の本社が置かれて以来、アメリカのみならず世界の電機産業の中心地、エレクトリック・シティとして君臨したこの町に残されているGEの資料を見ることにあった。1974年に設立されたHall of History（1985年にHall of Electrical Historyに改称）は、GEの膨大な写真のコレクションと資料をGEの敷地内で専任のキュレーターによって整理、保管し、研究者の利用にも供していたが、1996年にスケネクタディ博物館（現在Museum of Innovation and Science）に移管されることになった。80年代から進んだリストラクチャリングにより、スケネクタディ工場（Schenectady Works）の建物の取り壊しが進み、保管場所を外部に確保する必要が生じたからであろう。GEの事業構造を製造部門からサービス・金融部門へと急速に転換しようとしていたジャック・ウェルチCEOにとって、古いGEの象徴的存在であるスケネクタディ工場に残された歴史遺産の保存は関心を引くようなものではなかったのではと想像する。私が招き入れられた博物館の地下の一室にうずたかく積み上げられた膨大な資料達はそこに閉じ込められているかのようであり、それまで通っていたハグリー博物館との落差に呆然とした。ハグリーはデュボン社の火薬工場跡地とデュボン家の美しい広大な敷地内にあり、資料は整然と整理され、利用者は数人のアーキビストを通じて目指す資料にアクセスできる仕組みになっていた。こちらはといえば、一応の目録（finding aids）はあるものの、資料へのアクセスはキュレーターのChris Hunter氏の驚異的な記憶力と探索力に頼らざるを得ないのである。しかも氏は博物館業務に多忙であり、その結果、私は資料の山を直接、自由に涉猟できるという幸運に恵まれることになった。

GEで働く人びととスケネクタディの町はGEの資料と同様に過酷な運命をたどることになる。

アムトラックのスケネクタディ駅はスケネクタディ工

場からまっすぐに伸びているエリー・ブルバードに面しており、GEのモノグラムを冠した旧本社建物を遠くに仰ぎ見ることができるが、そこに降り立ったときに目のあたりにした荒廃した風景は衝撃的であった。ここは、GEに通う人と自動車でごった返し、ストライキともなればローカル301によって組織された万を超える労働者によって埋め尽くされた幹線道路である。それと交差するステイト・ストリートに入りダウントウンを歩いていると次第に恐怖に駆られてきた。町全体が寂れ、人の気配がしない。かつては、有名なプロクターズ劇場を中心に繁華街が開け、多数の市民が集った繁栄の町は静まりかえていた。10万近い人口を誇ったエレクトリック・シティの衰退はGEのリストラと無関係ではない。最盛期に4万人近かった従業員は4千人程度までに減少した。それは市の経済に大きな打撃を与えたばかりでなく、工場に通う労働者が住む近郊の町にも荒廃をもたらすことになった。かつて羨望の的であったGEの労働者はブアー・ホワイトへと没落したのであろうか。トランプ大統領が「雇用を取り戻す」と叫んでも、GEが雇用を増やすことはないであろう。しかし、それでもなお、ダウントウンを取り囲むように貧しい人びとの住居が密集し、多くの人びとがこの町でなんとか生活の糧を得ようとしている。

資料に引き寄せられて度々当地を訪れるようになったが（ここ数年は毎年）、町の姿は少しずつ変化し、気がついてみれば相当の変わりようである。次第に町はラスト（錆）を落として活気を取り戻しつつある。市はプロクターズ劇場のリノベーションを中心にダウントウンの再開発を進め、新しいレストランと酒場が次々と開店し、映画館も新設され、新しいホテルも開業した。市はGE頼みだった経済を中堅、中小企業を中心に新しい方向に変化させようと努力しているように見える。さらに、モホーク川のウォーターフロント開発をカジノ誘致をてこに進めようとしている。その方向が正しいのかどうか、私には判断がつかないが、資料探索を続けるつもりの際は、この町の発展と住民の幸せを祈るばかりである。

（中央大学教授）

## 2018年 アメリカ学会第52回年次大会 プログラム

(アメリカ学会 HP 上で参加登録をお願いします。)

1. 開催日 2018年6月2日(土), 6月3日(日)
2. 会場 北九州市立大学北方キャンパス  
〒802-8577 福岡県北九州市小倉南区北方4丁目2番1号  
交通アクセス: <https://www.kitakyu-u.ac.jp/access/kitagata.html>  
会場校連絡先 中野博文(電話: 093-964-4077 Email: jaas2018@kitakyu-u.ac.jp)
3. 受付 本館1階 キャリアセンター・プロジェクトルーム
4. プログラム (報告要旨は大会会場で配布する【大会要項・報告要旨集】に掲載します。)

### 第1日 6月2日(土)

午前の部 自由論題 9:15~11:45

\*\*“GS” denotes “graduate student.”

#### 【自由論題 A The United States and the World in the Nuclear Age】 本館 C-202

司会: Miya SUGA 菅 美 弥 (Tokyo Gakugei University 東京学芸大)

討論: Fumiko NISHIZAKI 西崎 文子 (University of Tokyo 東京大学)

Randal L. HALL (Rice University)

“Democracy, Resources, and the Environment in 1950s America”

John HOWARD (King’s College London)

“After Uncle Sam: Labor, Loss, and Nuclear Disaster in Isabel Álvarez’s La Base”

Kazushi MINAMI 南 和 志 (University of Texas at Austin, GS)

“The New Open-Door Constituents: Grassroots Activism for the Reconstruction of U.S.-Chinese Relations in the Cold War”

#### 【自由論題 B Representation and Digital World】 本館 C-203

司会: Yuko MATSUKAWA 松川 祐子 (Seijo University 成城大学)

討論: Keita HATOOKA 波戸岡景太 (Meiji University 明治大学)

Edward K. CHAN (Waseda University 早稲田大学)

“Constructing an Online Reference Database for Cinematic Connections between the US and Japan”

Cem KILÇARSLAN (Hacettepe University)

“The Past, the Present and the Future: Manipulation of History and Memory in Science Fiction Works in the Post-Truth Era”

#### 【自由論題 C Activism and American Society】 本館 C-302

司会: Masako NAKAMURA 中村 雅子 (J. F. Oberlin University 桜美林大学)

討論: Yasuo ENDO 遠藤 泰生 (University of Tokyo 東京大学)

Jeffery A. JOHNSON (Providence College)

“The Revolution of the Future: Shusui Kotuku in California”

Bruce P. BOTTORFF (Kansai Gaidai University 関西外国語大学)

“Forging American Womanhood: The Acculturation of Honolulu’s Second-Generation Immigrant Girls, 1920s-1930s”

Alan WILLIAMS (University of Washington)

“Queering the Color Line within the Color Line: W. E. B. Dubois and the Transpacific”

#### 【自由論題 D 文学におけるポリティクス】 本館 C-303

司会: 宮本 敬子 (西南学院大学) 討論: 舌津 智之 (立教大学)

松田 卓也 (ノース・テキサス大学・院)

「Norman Mailer の The Naked and the Dead におけるインターレイシャルでトランスナショナルな想像力」

田浦 紘一郎 (成蹊大学・院)

「Calling Nature—Moby-Dick における空間表象と適切な名前」

五十嵐 舞 (一橋大学・院)

「わたし自身が選んだ愛——トニ・モリスン『ジャズ』における愛と自己選択」

杉野 俊子 (工学院大学)

「吉川八重と「鈴木という」男——家族史から1900年代初期の日系アメリカ移民を探る」

#### 【自由論題 E 「アメリカ化」の諸相】 本館 D-301

司会: 菅原 和行 (福岡大学) 討論: 大森 一輝 (北海学園大学)

齋藤 祐実 (愛知大学)	「1970年代のハワイ州内でのアフリカ系アメリカ人」
井口裕紀子 (同志社大学・院)	「ウィメンズマーチにおけるソーシャルメディアとクラフティヴィズムの役割」
春田 素夫	「インディアン領 (the Indian Territory)」という言葉」
石黒 安里 (同志社大学)	「シオニズムへの相反する態度から見る改革派ユダヤ教のアメリカ化——カウフマン・コーラーを中心に——」

【自由論題 F Intimate Histories of US Imperialism and Colonialism】 本館 D-302

司会：Eiichiro AZUMA 東 栄 一 郎 (University of Pennsylvania)

討論：Sayuri SHIMIZU 清水さゆり (Rice University)

Maki KODAMA 児 玉 真 希 (Rice University, GS)

“Writing to Sell Texas: Women’s Travel Accounts and Settler Colonialism, 1830s-1850s”

Minami NISHIOKA 西岡みなみ (University of Tennessee at Knoxville, GS)

“The U.S. in Asia in the 1870s: General Grant’s Visit to East Asia and the Japanese Annexation of Ryukyu”

Eri KITADA 北 田 依 利 (Rutgers University New Brunswick, GS)

“The Fantasy of ‘Native Savagery’ Masculinity and the Intertwined Imperialism of Japan and the United States in a Philippine ‘Frontier’”

Yuki TAKAUCHI 高 内 悠 貴 (The University of Illinois at Urbana-Champaign, GS)

“Queens of the Ryukyu Islands: Filipino Workers and the Celebration of the Fourth of July Independence Day in Okinawa under the US Military Occupation”

昼食休憩 12：00～12：50

理事・評議員会 12：05～12：50 本館 C-301

午後の部

清水博賞・斎藤眞賞授賞式 13：00～13：10 本館 A-101

第一部：会長講演シンポジウム 13：15～15：45 本館 A-101

Chair: Yuko TAKAHASHI 高 橋 裕 子 (Vice President, JAAS/Tsuda University アメリカ学会副会長/津田塾大学)

Keynote Speech 1: Edward L. AYERS (President, OAH/University of Richmond)

“Civil War, Defeat, and Reconstruction in the United States”

Discussant: Ken CHUJO 中 條 献 (J.F. Oberlin University 桜美林大学)

Keynote Speech 2: Fumiaki KUBO 久 保 文 明 (President, JAAS/University of Tokyo アメリカ学会会長/東京大学)

“Japan-US Alliance in the Face of Populism: The Vulnerability of the Asymmetric Alliance in Terms of the Rights and Obligations”

Discussant: Takuya SASAKI 佐々木卓也 (Rikkyo University 立教大学)

第二部：ラウンドテーブル「カントリーミュージックを通して見える米国社会」 16：00～17：30 本館 A-101

司会：久保文明 (東京大学)

講師・演奏：チャーリー永谷 (ミュージシャン)

コメント：松岡 泰 (熊本県立大学名誉教授)

青木 深 (東京女子大学)

懇親会 18：30～20：30 リーガロイヤル小倉

〒802-0001 福岡県北九州市小倉北区浅野2丁目14-2 Tel：093-531-1121

\*\*\*\*\*

第2日 6月3日 (日)

午前の部 JAAS-ASAK パネル・部会・Workshop 9：00～11：30

【JAAS-ASAK PANEL Distant-reading Elizabeth Bishop and Travels】 本館 C-302

司会：Tomoyuki IINO 飯野友幸 (JAAS/Sophia University 上智大学)

報告：

Yangsoon KIM (President, ASAK/Korea University)

“Travelling across Borders: The Exterior and Interior Landscapes in Elizabeth Bishop’s Poetry”

Akitoshi NAGAHATA 長 畑 明 利 (JAAS/Nagoya University 名古屋大学)

“Questions of Travel in the Works of Elizabeth Bishop and Yoko Tawada”

Meghan KUCKELMAN (JAAS/Meio University 名桜大学)

“Myself in a Distant Land: The Travel Writing of Elizabeth Bishop and Leslie Scalapino”

【WORKSHOP A Transpacific Overtures: The Black Atlantic and Settler Colonialism I】本館 C-303

司会：Fuminori MINAMIKAWA 南 川 文 里 (JAAS/Ritsumeikan University 立命館大学)

討論：Taihei OKADA 岡 田 泰 平 (JAAS/University of Tokyo 東京大学)

報告：

Junaid RANA (ASA/University of Illinois at Urbana-Champaign)

“Become the People: US Left History and the Global Muslim South”

Bethel SALER (OAH/Haverford College)

“Unsettling the Category of Settler Colonialism”

Katherine BENTON-COHEN (OAH/Georgetown University)

“Black Votes Matter: Black Suffrage and the Immigration Act of 1917”

Rika LEE 李 里 花 (JAAS/Tama Art University 多摩美術大学)

“Becoming ‘Korean’ Dancer in Postwar Hawai‘i: Halla Pai Huhm and her Transpacific Routes”

【部会 A 19 世紀アメリカと家事をめぐる言説】本館 C-202

司会：下 條 恵 子 (九州大学) 討論：小 檜 山 ル イ (東京女子大学)

報告：細 谷 等 (明星大学)

「家事、効率、ユートピア—世紀転換期アメリカの家事情」

佐 藤 光 重 (成城大学)

「『イオラオスのような友もなく』——『ウォールデン』における労働」

久 田 由 佳 子 (愛知県立大学)

「19 世紀前半ニューイングランドにおける市場革命と家事労働」

【部会 B 20 世紀アメリカの諸思想】本館 C-203

司会：中 野 勝 郎 (法政大学) 討論：井 上 弘 貴 (神戸大学)

報告：生 澤 繁 樹 (名古屋大学)

「ジョン・デューイと社会変革への教育」

岡 山 裕 (慶應義塾大学)

「在来種なのか外来種なのか？アメリカ行政国家の正当性論争」

中 野 博 文 (北九州市立大学)

「帝国主義と国際主義の狭間で——東部知識人が抱いた文明観の転換」

昼食休憩 11：30～13：10

分科会 11：40～12：55 (内容については下記「分科会のご案内」をご参照ください。)

新理事会 12：30～13：00 本館 C-301

総会 13：10～13：40 本館 C-301

午後の部 13：50～16：20 部会・Workshop

【WORKSHOP B Transpacific Overtures: The Black Atlantic and Settler Colonialism II】本館 C-202

司会：Takashi ASO 麻 生 享 志 (JAAS/Waseda University 早稲田大学)

討論：Rika NAKAMURA 中 村 理 香 (JAAS/Seijo University 成城大学)

報告：

Jay GARCIA (ASA/New York University)

“Randle Bourne, ‘Trans-National America,’ and Settler Colonialism”

Junyon KIM (ASAK/Hongik University)

“The African Diaspora Revisited in the Post-Racial Era”

Naoko SUGIYAMA 杉 山 直 子 (JAAS/Japan Women’s University 日本女子大学)

“One World, Many Tribes”: Transnational Imagination in Leslie Marmon Silko’s *Almanac of the Dead*”

【部会 C アダプテーションの功罪——「映画化」を超える批評性を求めて】本館 C-203

司会：川 本 徹 (名古屋市立大学) 討論：日 野 原 慶 (大東文化大学) 西 山 智 則 (埼玉学園大学)

報告：和 氣 一 成 (早稲田大学)

「交差するアダプテーション」

新 井 潤 美 (上智大学)

「オーステイン映画の解釈と受容」

川本 徹 (名古屋市立大学) 「ボンネットを被った西部劇——女性開拓者の日記と『ミークス・カットオフ』」  
 武田 悠一 (元南山大学) 「物語のサバイバル——『ブレードランナー』をめぐって」

【部会D 文化冷戦の諸相——ロックフェラー財団・翻訳・Creative Writing】 本館 C-302

司会：越智 博美 (一橋大学) 討論：中 嶋 啓 雄 (大阪大学)  
 報告：井上 健 (日本大学) 「冷戦初期日本におけるアメリカ小説翻訳」  
 金 志 映 (成均館大学) 「文化冷戦下における日本文学者の渡米——ロックフェラー財団の文学支援を視座として」  
 吉田 恭子 (立命館大学) 「冷戦とクリエイティブ・ライティング」

【部会E 「争うアメリカ」の諸相】 本館 C-301

司会：清原 聖子 (明治大学) 討論：飯 田 健 (同志社大学)  
 報告：安岡 正晴 (神戸大学) 「トランプ政権 対 聖域都市：「不法移民」をめぐる連邦州—地方府関係の現段階」  
 会 沢 恒 (北海道大学) 「政策変更の法的回路：トランプ政権」  
 兼 子 歩 (明治大学) 「トランプの時代におけるジェンダーと人種の交錯」

5. 注意事項

- 大会参加登録は、学会ホームページの大会参加登録ページ上で5月6日までにお願い致します。大会前日開催の市民向けシンポジウムの参加申込みも同様をお願い致します。
- 懇親会の参加には事前の申し込みが必要です。大会参加登録ページでお申し込みのうえ、懇親会費 5,500 円を5月16日までにご納入ください。払い込まれた懇親会費はいかなる事情があってもお返できませんので、ご注意ください。当日参加については会費 6,000 円を予定しておりますが、人数に限りがございます。必ず参加をご希望の場合は事前の払い込みをお勧めいたします。
- 年会費の当日払いは受け付けられませんのでご了承ください。
- 昼食：6月2日(土)、3日(日)ともに、大学内の食堂が営業しております。
- 会場までの交通アクセスについては、学会ホームページをご覧ください。宿泊や交通手段の確保は各自をお願いいたします。
- 大会初日午後の会長講演シンポジウム、ラウンドテーブルは一般公開となっております。また北九州観光コンベンション協会の協賛、北九州市立大学、北九州市などからの後援をいただくため、今回の年次大会では非会員の大会参加費の徴収はいたしません。但し、参加にあたっては会場受付でご登録をお願いいたします。
- 事前参加登録者数により会場が変更になることがあります。
- 理事・評議員会について、弁当の注文は受け付けませんので、ご了承ください。

6. 会場案内 (全て本館で行われます)

受付	キャリアセンター・プロジェクトルーム
書店等出店	正面玄関前ロビー
会員用控室	C-201
本部スタッフ・役員控室	D-203
外国人ゲスト控室	B-201
登壇者用控室	B-202

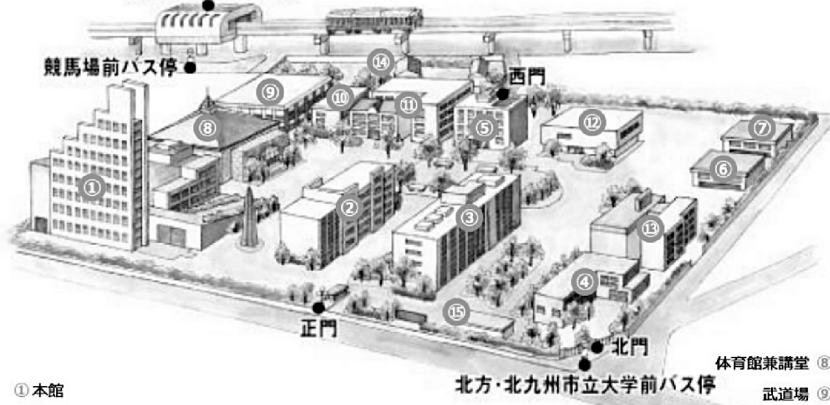
6月2日(土)

午前 自由論題	C-202, 203, 302, 303, 301, 302
昼食時 理事会・評議員会	C-301
午後 授賞式、会長講演シンポジウム、ラウンドテーブル	A-101
懇親会	リーガロイヤル小倉

6月3日(日)

午前 部会およびワークショップ	C-202, 203, 302, 303
昼食時 分科会	D-201, 202, 301, 302, 303, 304, 401, 402, 403, 404
午後 新理事・評議員会	C-301
総会	C-301
部会およびワークショップ	C-202, 203, 301, 302

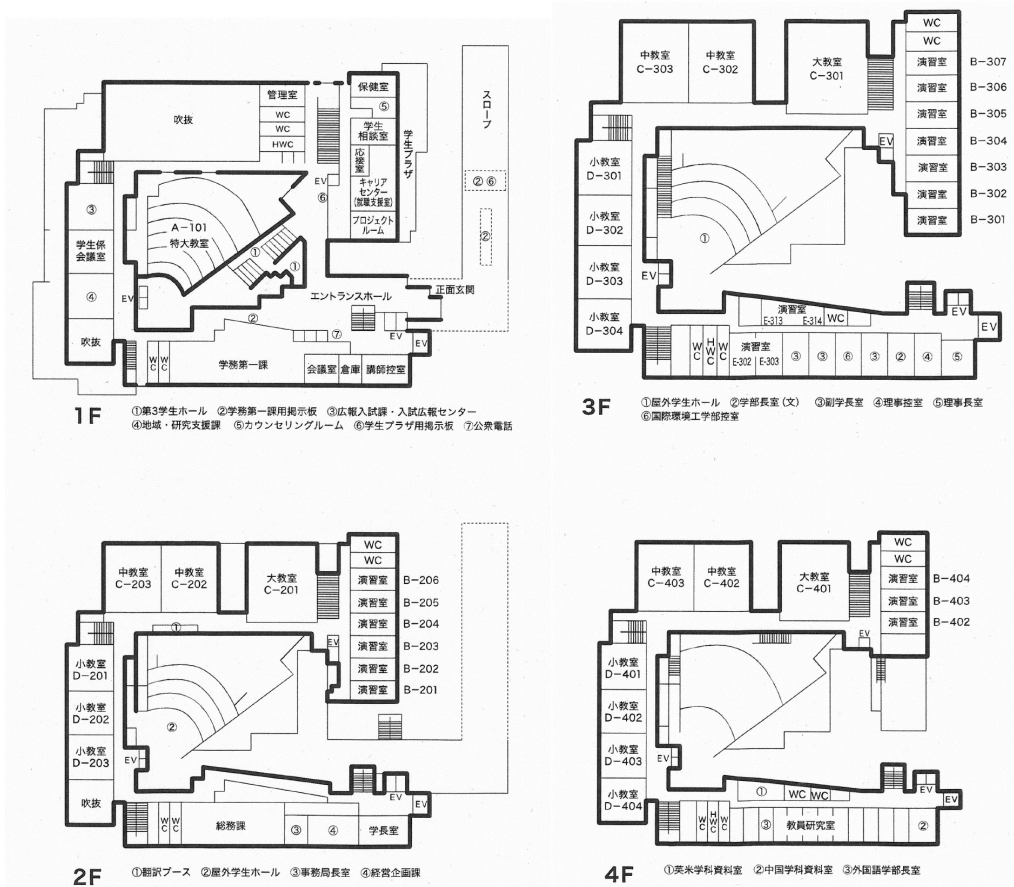
モノレール競馬場前  
(北九州市立大学前)



- ① 本館
- ② 1号館
- ③ 2号館 (国際教育交流センター)
- ④ 3号館 (北九州産業社会研究所・大学院)
- ⑤ 4号館
- ⑥ 6号館
- ⑦ 7号館

- 体育館兼講堂 ⑧
- 武道場 ⑨
- 同窓会館 ⑩
- サークル会館 ⑪
- 厚生会館 ⑫
- 図書館 ⑬
- 弓道場 ⑭
- 部室 ⑮

【本館】



## 第 52 回年次大会 分科会のご案内 6月3日(日) 11:40~12:55

### 1. 「アメリカ政治」 責任者：菅原和行（福岡大学）ksugawara@fukuoka-u.ac.jp 本館 D-301

テーマ：「2018 年中間選挙を考える」

報告者：山岸敬和（南山大学）

2018 年 11 月に行われる中間選挙の結果は、トランプ政権への審判がどのように下されるのかという意味で重要である。しかしそれに留まらず、それは 2020 年の大統領選挙の行方にも大きな影響を及ぼす。歴史的な低支持率を続けるトランプ政権への評価が、議会選挙にどのように影響を与えるのか。トランプ氏が選挙公約として掲げながら達成できていない問題—オバマケア撤廃やメキシコ国境の壁建設などの国内政策、対イラン政策をはじめとする対外政策の転換など—が中間選挙にどのように影響を及ぼすのか。そして、中長期的な政治状況の変化の中で、今回の中間選挙をどのように捉えたら良いのかについても議論したい

### 2. 「アメリカ国際関係史研究」 責任者：森聡（法政大学）smori@hosei.ac.jp 本館 D-302

テーマ：【合評会】菅英輝著『冷戦と「アメリカの世紀」—アジアにおける「非公式帝国」の秩序形成』（岩波書店、2016 年）

報告者：菅英輝（京都外国語大学）、中島琢磨（龍谷大学）、水本義彦（獨協大学）

菅英輝会員の著作『冷戦と「アメリカの世紀」—アジアにおける「非公式帝国」の秩序形成』について、中島琢磨会員と水本義彦会員より書評コメントを発表する。右を受け、著者・菅会員より応答の後、フロアとの質疑応答を行う。冷戦期アメリカによる地域秩序の形成をめぐる諸問題に関心のある会員におかれては、奮ってご参加いただきたい。

### 3. 「日米関係」 責任者：末次俊之（専修大学）suetoshi007@gmail.com 本館 D-303

テーマ：報告：「トランプ政権 1 年目の紛争介入政策：アジア太平洋地域への示唆を視野に」

報告者：西住祐亮（中央大学・講）

各政権が世界各地の紛争にどの程度、またどのような形で関与・介入するかという問題は、一義的には各事例に即して検討すべきものである。しかし同時に、事例を貫いて観察できる大きな特徴が、政権ごとにあるのも確かであり、こうした大きな特徴を把握することは、各政権の基本的な世界観や政策決定スタイルを理解する一助ともなる。

オバマ前政権については、介入にも不介入にも過度に傾斜しない中間的性格や、有権者の反応に対する配慮の強さといった特徴が、事例を貫いて観察された。これに対して、現在のトランプ政権については、不透明な部分がまだまだ多い。ただおぼろげではあるが、幾つかの特徴が明らかになりつつあることも確かである。例えば、介入と不介入の間で大きく姿勢が変化する傾向や、行政府内の足並みの乱れが顕在化しやすい点などは、複数の事例で観察できるものと言える。

この報告では、オバマ前政権との比較を通して、トランプ政権の紛争介入政策を概観し、その上で、アジア太平洋地域への示唆についても検討する。

### 4. 「経済・経済史」 責任者：名和洋人（名城大学）nawa@meijo-u.ac.jp 本館 D-304

テーマ：「アメリカ移民制限政策の成立と企業・経営者団体—19 世末から 1920 年代まで—」

報告者：下斗米秀之（敬愛大学）

移民の自由な流入は、「移民の国」アメリカを特徴づける経済成長の源泉であった。それにもかかわらず、アメリカは好景気と言われた 1920 年代に、自由放任的な移民政策から移民制限政策へと舵を切った。労働力需要の多くを移民労働者に負っていたアメリカ企業は移民制限をどのように捉えていたのか。本報告では移民問題に関する企業経営者らの活動を跡付け、彼らの移民政策への影響力を検証する。その際、企業規模や構成メンバーの異なる 3 つの経営者団体の活動、企業経営者が連邦議会や移民行政に対して行った請願活動を考察の軸に据える。アメリカ移民法の改革運動を担った企業の客観的な利害状況とその改革意識を、さらには 1920 年代の移民政策策定における産業界の役割をより明確なものにしたい。このことにより、個人の国籍・人種といった「属性的要素」を基準に移民を選別していた 1920 年代においても、国内労働力市場の需給関係を考慮した雇用基準の要素が組み込まれたことを明らかにする。

### 5. 「アジア系アメリカ研究」 責任者：野崎京子（京都産業大学）nozaki@cc.kyoto-su.ac.jp 本館 D-201

テーマ：「アジア系アメリカ人研究と日本人娼婦の歴史経験」

報告者：大原関一浩（摂南大学）

明治期に北米西部に移住し売春に従事した日本人女性たちの経験は、アジア系アメリカ人史の一部であるが、研究は進んでこなかった。日本史の分野では、「からゆきさん」研究の蓄積があるが、近代日本の国家建設やアジアにおける膨張の枠組みのなかで彼女たちの経験が語られる時、北米は周辺的なトピックになる。しかし過去 20~30 年間で、人・モノ・情報の国際的な動きに歴史研究者の関心が集まるなかで、ジェンダー・セクシュアリティ・移住などが重要な研究テーマになりつつある。この報告では、2016 年に出版した著作の成果を紹介しながら、北米における日本人娼婦の歴史経験を研究する意義と課題を、特にアジア系アメリカ人研究との関連で検討する。

### 6. 「アメリカ女性史・ジェンダー研究」 責任者：鈴木周太郎（鶴見大学）shutarosuzuki@me.com 本館 D-202

テーマ：「日系アメリカ人二世の朝鮮戦争の従軍経験と市民権——ジェンダーとエスニシティの視点から」

報告者：臺丸谷美幸（水産大学校）

本報告はアメリカ合衆国市民として朝鮮戦争（1950-1953）へ従軍した日系アメリカ人二世に関する考察である。日系人は朝鮮戦争期から人種混成部隊に配属された。この背景には東西冷戦対立の激化と米国内における公民権運動の高まりがあった。従軍者の大半は二世男性であり、5000-6000人と推定される従軍者のうち、2000から3000人は朝鮮半島へ派兵され、僅かであるが二世女性も志願した。日系人が陸軍だけでなく、海軍、空軍、海兵隊へ志願が可能となるのも朝鮮戦争期からである。本報告では、カリフォルニア州で行った日系二世の朝鮮戦争退役軍人へのインタビューや退役軍人による自伝の分析を元に、日系二世たちの朝鮮戦争への志願動機を明らかにし、従軍経験が彼ら/彼女らの市民権へいかなる影響を及ぼしたのかをジェンダーとエスニシティの視点から検討する。

#### 7. 「アメリカ先住民研究」 責任者：佐藤円（大妻女子大学）mdsato@otuma.ac.jp 本館 D-401

テーマ：「先住民アイデンティティと文学分野における交雑性：シャーマン・アレクシーとトマス・キングの比較から」

報告者：長岡真吾（福岡女子大学）

討論者：余田真也（東洋大学）

先住民文化と主流文化との交雑と相互浸透をテーマに、シャーマン・アレクシーとトマス・キングというふたりの作家を比較して考察する。スポケーン/コダレン族であり保留地の出身であるアレクシーは、白人主流文化のなかで成功し受容されたことにより先住民コミュニティへの帰属を相対的に希薄化させていると考えられる部分がある。また先住民文化の継承という点でも独自の立場を保っている。それに対し、ギリシア系・ドイツ系とチェロキーの混血であるキングの方は、白人社会から出て先住民文化のなかへと向かい、作家としての活動を通して先住民文化を再構築し継承/強化していると見なすことができる。このふたりの作家を対照的なケースとして検証することによって、民族アイデンティティの真正性と文化アイデンティティの交雑性について考察する。

#### 8. 「初期アメリカ」 責任者：石川敬史（帝京大学）t-ishikawa@main.teikyo-u.ac.jp 本館 D-402

テーマ：「独立革命後の合衆国奴隷制史と‘second slavery’論」

報告者：西出敬一（徳島大学・名）

独立革命を境にして北米の奴隷制史が大きく変る。(1) 奴隷制が、それを容認する憲法のもとで、初めて国家的制度となり、国家の政治と連動して発展する (pro-slavery politics)。(2) 奴隷制の領域的拡大対象が、メキシコ領からキューバまで、トランスナショナルな広がりをもつ (slave empire)。(3) 奴隷制が、産業革命後の新たな資本主義世界経済の主要な構成部分として発展する (capitalist world economy)。(4) 奴隷制生産に資本主義的手法—技術革新、時間による労働管理など—が導入される (modernity)。これらを19世紀の大西洋奴隷制—キューバ、ブラジル、旧南部—の空前の展開の中に位置づけるのが‘second slavery’論である。それは、従来の旧南部奴隷制史への一国的アプローチの限界を修正する、手掛かりとなりうると思われる。

#### 9. 「文化・芸術史」 責任者：小林剛（関西大学）go@kansai-u.ac.jp 本館 D-403

テーマ：ハイブリッド・カルチャーとしての戦前日本美術工芸

報告者：荒木慎也（成城大学・講）、中島朋子（東海大学）

近年、現代日本のメディア文化をハイブリッドなものとして捉える議論があちこちでよく見られるが、そうした日本的ハイブリッド性の起源は明治・大正期にあると言っていいだろう。欧米文化を受容したうえで変容し、異種混雑化、土着化の過程を経て創られた戦前日本の美術工芸を現代に繋がるものとして検証することによって、文化・芸術史研究に新たな視座を提供しようというのが今回の分科会の趣旨である。荒木氏には、日本の石膏デッサン教育がヨーロッパの美術アカデミズムやモダニズムの影響を受けつつ、独自の教育論として発展していった歴史過程を、技法と教材の両面から報告してもらい、中島氏には、日本の装身具が、明治・大正期に政府・高等教育機関・民間企業の連携を通じて洋風デザインや技法を受容し、西洋宝飾品文化がローカル化しながら日本に定着していった歴史的過程について報告してもらおう予定である。

#### 10. 「アメリカ社会と人種」 責任者：武井寛（岐阜聖徳学園大学）h.takei@gifu.shotoku.ac.jp 本館 D-404

テーマ：「斧と犁と丸太小屋のホワイトネス—戦間期米国の入植者表象と人種論との関係性についてフィン系移民の祝祭運動から考える—」

報告者：鈴木俊弘（一橋大学大学院）

合衆国議会がデラウェア川流域の「ニュー・スウェーデン植民地」入植三百年周年記念祭（1938）にフィン系移民組織の参加を認めるとき、かれらが目標としたのは、米国史で「フィン人」を物語る書籍の文言と修辞を補正し、再流通させることだった。なぜなら当時「フィン人」は人種階梯論のなかで非白人種に分類されていたばかりか、スウェーデン系の執筆家たちが17世紀の「フィン人」を森林地帯の内奥を放浪し、放蕩に鳥獣を捕獲し森林を焼いていく「ノマド民」と表象していたからである。フィン系移民の試みの背景に浮かびあがるのは、先住民を定住せぬ退廃的人種として駆逐し、堅牢な住居と犁耕農地を築いていく農民を白人種の文明論的牽引者として礼賛する入植史観である。報告者は戦間期の米国における入植史表象に人種論がどのように嵌入していたのかを考察し、逆にその偏向を踏み台に白人性を獲得しようとしたフィン系移民たちの企図を紹介する。

河音琢郎・藤木剛康 編

『オバマ政権の経済政策——リベラリズムと  
アメリカ再生のゆくえ』

(ミネルヴァ書房, 2016年, 3,240円)

本書は、オバマのレガシーとポスト・オバマの政治経済を展望するうえで重要な手掛かりとなる。その特徴は、オバマ政権の経済政策を経済と政治との相互関係から多面的に分析していることであり、リベラリズムとアメリカ再生のゆくえを問いかけていることである。

本書の構成としては、第1章から第5章までが内政面の諸課題を分析し、移民政策を論じた第6章からが対外関係を考察したものとなっている。第1章では、サブプライムローン問題に端を発した住宅バブルの崩壊と金融危機の問題が、「長期停滞論」のマクロ経済動向とともに分析されている。第2章では、産業構造の変化と競争力・産業政策が検討され、リベラル派理念に基づいた政策を推進しようとしたオバマ政権の実績と課題が分析されている。第3章では財政政策が取り上げられ、オバマ政権が、大不況以後の巨額の財政赤字、政府債務の累積にいかに対処してきたのか検証されている。第4章では医療保障政策が検討され、オバマ政権が高い医療費負担の軽減と国民皆保険を目指してきたことが考察されている。第5章では、オバマが掲げた「変化」、「ミドルクラス経済の復活」の試金石であった年金政策が検討され、給付抑制、負担増大手段をめぐる超党派間での具体的な調整が進展したことを知ることができる。

第6章では論議を呼ぶ移民政策が取り上げられ、非正規滞在移民が1000万人以上に上る実情と、移民改革立法をめぐる推進派と反対派の対立がよく分かる。第7章は世界金融危機前後のアメリカ対外経済構造の変化を検証し、基軸通貨ドルの不安定化とオバマ政権の国際金融政策がよく分析されている。第8章では、通商政策の展開過程が対外関係の側面と国内の政治プロセスの両面から検討され、アメリカがTPPなどのメガFTA交渉に参加する一方で、通商政策が国家間競争を戦うためのツールであるとする「貿易の戦略的論理」を強調するようになったことも分かる。第9章は外交政策の理念を検討し、外交・安全保障政策の論争がよく整理され、その基本理念が「無極化する世界への先制的対応」と特徴づけることができるとされる。

終章では、錯綜するオバマ政権の評価が整理されており、オバマ政権の経済政策に対する総体的評価がまとめられ、ポスト・オバマの展望が示されている。特に、民主党統一政府下での第1期(2009～10年)、分割政府下で政策停滞が支配的となった第2期(2011年以降)、同じく政策停滞下にありながらもオバマが反転攻勢を強めた第3期(2013年以降)という3つの時期区分は有効であり、政治や外交の状況と経済政策のリンケージがよく検証されている。本書のキーワードのひとつ「決められない政治」が続くか、オバマの「未完のレガシー」が継承されるかどうかは、流動化した政治動向の行方にかかっていることを本書は教えてくれる。

河内信幸(中部大学)

廣部 泉 著

『人種戦争という寓話——黄禍論とアジア主義』

(名古屋大学出版会, 2017年, 5,832円)

本書は、アメリカの政策決定における「黄禍論」や「アジア主義」といった人種要因に焦点を当てた研究書である。1890年代半ばからアジア太平洋戦争終結に至る半世紀において、アメリカの政策決定者たちが日本と対する上で、人種要因をどれほど考慮し、政策がその影響を受けたのか、という問いに、アメリカ国務省史料、新聞記事を博捜して明確な答えを提示している。

結論を先に言えば、著者は、政策決定者のレベルで、人種主義要因がその戦争政策決定の中心的位置を占めるようなことはなかった、という立場をとる。

しかし、戦争に至る様々な場面で人種主義的思考が、大きな影響力を持ったことも事実であり、本書でも多くの興味深いエピソードが語られる。

第1章では、黄禍論が、日露戦争に起源を持つという一般的なイメージに反し、日清戦争が契機となっており、日中同盟への恐怖が核となることが指摘される。近代化した日本が、中国と連携して、もしくは膨大な数の中国人を率いて欧米を侵略するのではないかという懸念である。また、黄禍論にアメリカが冷淡であったのに対して、ロシアが熱心だったのは、人種を強調してロシア自身が欧米の一角と認められたいという動機があったとされる。後にアメリカ社会においては東南欧系新移民がカラーラインの形成にイニシアティブを発揮するが、黄禍論にも同様の可能性があったことをうかがわせる。

第2章では、欧米における黄禍論的主張に苛立った日本の人々がアジア主義を対抗言説化することに対して、アメリカの政策決定者たちの対応が分析される。彼らは、合理的に思考してアジア主義の重要性を否定しつつも、不安を抱かずにはいられないという傾向が顕著であった。

第3章から第5章までは、「黄禍論」と「アジア主義」が相互に強化し合う悪循環が指摘されると共に、それにもかかわらず、アメリカの政策決定者は人種的要因によってその政策を左右されなかったことが慎重に実証されている。

しかし、そのようなアメリカの政策決定者たちに衝撃をもたらしたのが真珠湾攻撃であった。第6章において、著者は、それまで抑制されていた人種主義的政策が真珠湾攻撃を機に噴出したと論ずる。本書の特徴は、アメリカ社会における人種主義的思考に関するターニングポイントとして真珠湾攻撃を極めて重視していることである。アメリカの政策決定者たちは、日本はアメリカとの戦争を回避する合理性を有していると考えていただけに、真珠湾攻撃という彼らには理解不能な行動を目の当たりにし、激しく動揺した。たとえば、ホーンベックは、国務省極東部において長年、極東政策に関わり、日本が対米開戦に踏み切ることはあるまいと信じていただけに、開戦後は人種主義的思考を重視するようになった。しかし、それにもかかわらず、最終的に人種主義要因がアメリカの戦争政策決定の中心にはならなかったのである。

アメリカ国内において黄禍論的言説があふれていたにもかかわらず、黄禍論的思考が政策決定から除外されたことを丁寧に実証していく本書は、アメリカ社会を理解する上で必読の書と言える。

高光佳絵(千葉大学)

大地真介 著

『フォークナーのヨクナパトーファ小説』

——人種・階級・ジェンダーの境界のゆらぎ』

(彩流社, 2017年, 2,808円)

日本においてアメリカ文学を研究するということはどのような意味を持つのか、という問いは、日本の研究者にとって、常に、過去も、そして現在もまさに忘れてはならない問いのほずである。本書の基底にあるのは、そのような問いと真正面から対峙しようとする姿勢といえる。

本書の構成は大きく二部構成となっており、第Ⅰ部ではフォークナーの代表作の分析、第Ⅱ部ではフォークナー文学と現代文学や映画との比較検証が中心となっている。第Ⅰ部「ヨクナパトーファ小説における旧南部解体」では、『響きと怒り』『八月の光』『アブサロム、アブサロム！』『行け、モーセ』というフォークナー作品の中でも代表作といわれる作品を取り上げ、それぞれ同時期か、あるいは前後して執筆された他の作品と比較し、これら四作品が傑作である所以を明らかとしていく。四作品に共通するテーマは、南北戦争の敗北による旧南部社会の基盤の解体であり、いわゆる南部貴族の白人男性層の解体が、人種・階級・ジェンダーの境界が劇的にゆらぐさまによって描かれていくと著者は論じる。例えば、第3章では『アブサロム、アブサロム！』と『征服されざる人びと』を詳細に比較した上で、フォークナー自身の家系をモデルにしたサートリス家の物語ではサートリス大佐の不滅性が確認されるのに対し、サトペン家の物語では、サトペンの失墜が、時間的にも空間的にも解体されるストーリーのゆらぎと連動することで強調され、批判的に描かれていると指摘する。旧南部社会に対するフォークナーの歴史的な視座が、『八月の光』から『アブサロム、アブサロム！』にさらに深化する形で受け継がれている、という分析は説得力があるものだ。第Ⅰ部で明らかに出来るのは、自らの出自に対するフォークナーの批判的な眼差しであり、旧南部社会と向き合おうとする、作家としてのフォークナーの軌跡であるといえるだろう。

第二部では、コーマック・マッカーシーから映画作家のタランティーノ、イニャリトウ、アリアガ、そして横溝正史と、実に幅広い視点から、フォークナー作品との関連性が論じられている。フォークナーの技法がどのように影響を与えているか、さらには、フォークナーのテーマが現代にどのように受け継がれているかについての刺激的な論が続く。中でも、横溝正史を取り上げた第7章における、フォークナーと横溝に共通する、それぞれの社会に対する矛盾する姿勢を指摘していく箇所はスリリングだ。

本書の何よりの特徴は、論の前提となる基本的概念や歴史的背景を丁寧に押さえた上でテキストの緻密な分析を行いつつ、論はあくまでも明快で揺るぎがないという点にある。最後を飾る第8章「日本におけるアメリカ文学研究の確立—大橋健三郎—」で語られる、アメリカ文学を研究する際に必要な心構えの重みと、そしてフォークナー文学の核心となる言葉“endure”が受け継がれていることを感じさせる一冊である。

佐々木真理 (実践女子大学)

風呂本惇子・松本 昇・

鶴殿えりか・森あおい 編

『新たなるトニ・モリスン』

——その小説世界を拓く』

(金星堂, 2017年, 3,240円)

本書は、長らくモリスン研究に従事してきた気鋭のアフリカ系アメリカ文学研究者らによる「新しい」トニ・モリスンの論文集である。本書の「新しさ」について真先に挙げるべきは、本書がこれまで出版されたモリスンの全小説を網羅していることである。モリスンの全作品を射程に入れた研究書はこれまで日本で出版されていない。本書のもう一つの「新しさ」は、各論考が、絵画や写真などに注目する文化批評や近年隆盛を誇るトラウマ理論、環境批評といった新鮮な切り口でモリスン文学の解釈を試みている点である。

本論は、十一の長編小説と短編、戯曲一篇ずつの分析を出版年順に並べた全十三章からなる。第一章では、宮本敬子が『青い眼が欲しい』における色彩表現に着目し、黒人抽象主義画家ノーマン・ルイスからの強い影響を指摘する。第二章では、戸田由紀子がテネシー・ウィリアムズの『バラの刺青』からの一節をヒントに、『スーラ』における新たな女性のセクシュアリティ像を検討する。第三章では、山野茂がモリスンの「ホーム」論から、『ソロモンの歌』を論じる。西本あづさによる第四章は、『タール・ベイビー』が以後の文学的テーマを練り上げる空間となっていると指摘し、作家のキャリアにおいて分水嶺となると論じる。第五章では、時里祐子がキャシー・カールスのトラウマ理論から短編「レシタティブ」を読み直し、その仔細を分析する。第六章では、小林朋子が『ビラヴド』の中の自己解放のプロセスに注目し、登場人物がヘーゲルの二元論を攪乱する様を検討する。森あおいの手になる第七章は、『白さと想像力』での「闇」をめぐる論考が、『ジャズ』における写真や音楽の表象に戦略的に展開されていると鋭く指摘する。浅井千晶の第八章は、「汚染」をキーワードに環境批評という今日的な観点から『パラダイス』を読む。深瀬有希子が担当する第九章は、アトランティック・ブルー・クラブというカニの生態に着目し、黒人環境主義の視点から『ラヴ』を読み解く独創的な論考である。第十章では、程文清が『マーシイ』における「旅」と植民地時代の複雑な人種問題の関係性を検する。続く第十一章は、ハーン小路恭子が戯曲『デズデモナー』での『オセロー』の翻案についてディアスポラの歴史観から考察する。第十二章、鶴殿えりかの『ホーム』論は、「ヘンゼルとグレーテル」という下敷きが兄妹のトラウマ体験を軸に「アッシャー家の崩壊」という悲劇的枠組みに変容していく様を巧みに論じる。そして、第十三章の風呂本惇子による『神よ、あの子を守りたまえ』論は、機能不全の母親を補完する「母代わり」をテーマに、モリスン文学における人間のきずなの意義を探る。

多角的かつ包括的にモリスン作品の分析に取り組む本書は、モリスン小説の醍醐味と深遠な魅力を十全に伝えてくれる。『新たなるトニ・モリスン』は、モリスン研究者たちの長年の研鑽の集大成といえる一冊である。

岡島 慶 (目白大学)

塩田弘・松永京子・浅井千晶・伊藤詔子・  
大野美砂・上岡克己・藤江啓子 編  
『エコクリティシズムの波を超えて

——人新世の地球を生きる』

(音羽書房鶴見書店, 2017年, 4104円)

1970年のアースデーを一つの契機として始まったエコクリティシズムは、1996年のThe Ecocriticism Reader 刊行によってその輪郭を明らかにした。本書『エコクリティシズムの波を超えて』の序章を飾るスコット・スロヴィックは、この研究領域がReader成立の前と後とで、すでに二つの「波」を経験していると指摘し、その上で、2000年以降、グローバリズムとの関係で第三の波、さらにはマテリアリズムとの関係で第四の波が起こったと報告する。

もちろん、こうした分析が徹視的であることは、スロヴィック本人も自覚している。なにしろ、第〇波と第〇波の対立というのは、大概、同じイズムに賛同するものたちの世代間闘争に過ぎないからだ。ゆえに、本書の編者たちは、学問的運動を簡単に歴史化してしまう「波」のメタファーを乗り越えるべく、自らの批評的営為を巨視的に捉え、骨太なものに進化させようとする。

各章を概観していこう。辻祥子は版画家オーデュボンの文章を分析し、大島由起子と藤江啓子は、それぞれ鯨抜きのメルヴィルの自然観を論じる。大野美砂がホーソンの戦争風景を読むと、真野剛は鉄道表象にソローと漱石の近代的自我を見出し、浜本隆三がトウェインのパストラリズムの現代的インパクトを検証する。ポーの第四の波的読解を試みた伊藤詔子に続いて、浅井千晶がカーソンの海を、塩田弘がスロヴィックの盟友リック・パスの地図を読んでいく。

そして、岸野英美はオゼキの描くメディアから、林千恵子は北米先住民族の物語から、荒木陽子はアトランティック・カナダの文学から、それぞれ環境論的に重要なメッセージを受け取る。一方で、デビッド・フェネルによって紐解かれた環境論的SFには、中村善雄がホーソンの貢献を書き付け、日臺晴子がワイルド経由のポストヒューマン論を展開する。続く中山悟視のヴォネガット論は、マイケル・ゴーマンのトウェイン論や、原田和恵による上田早夕里論と足並みを揃え、人類そのものを他者化する文学的想像力を称揚し、それは物質志向の存在論を日野文学に見る芳賀浩一の論へと接続される。

本書は最後に、「核」に抗する言葉の探求へと私たちを誘い、そのために松永京子は詩人ヒューズを、水野敦子はチカーノ作家アナーヤを、三重野佳子は晩年のマラマッドを、深井美智子と牧野理英はハワイ在住の日系人作家コーノを、一谷智子はカナダ先住民演劇の秀英クレメンツをそれぞれに参照してみせる。また、序章にて提起されたエコクリティシズムの「巨視的な歴史的概説」を巧みな物語学的転回により「環太平洋の比較生態学研究の可能性」へと開いた異孝之の終章は、430頁を超える本書に一層の厚みを加える。

「人新世」という新たな地質年代が提唱される以前より、環境思想をリードしてきたエコクリティシズム。その知的営みの地層構造を明らかにすることに、本書は喜事に成功している。

波戸岡景太 (明治大学)

飯山千枝子 著

『母なる大地の器——アメリカ合衆国南西部  
プエブロ・インディアン「モノ」の文化史』

(晃洋書房, 2017年, 7,992円)

本書は、一括してプエブロ・インディアンと呼ばれてきたアメリカ合衆国南西部に暮らす先住民諸部族が長い年月作り続けてきた土器に焦点をあて、その作られ方の時代による変化を分析することを通して、白人による植民地化の歴史を生き抜いてきたアメリカ先住民の文化的生き残り戦略を解明しようとした労作である。多くのプエブロ土器に関する研究と本書が一線を画すのは、他の研究が土器をあくまで「モノ」として捉え、その製作法や様式の時代的変遷を追うことに傾注するのに対し、そのような変遷の意味を、プエブロ社会とそれを取り巻く外部社会との関係の在り様から読み解こうとしている点であり、またそこに先住民側の主体性を見出そうとしている点である。筆者はプエブロ・インディアンを植民地化の一方的な犠牲者とは見ておらず、そのことに評者は大いに共感する。

さて本書は、プエブロ土器の歴史を先史時代から現代まで時系列的にたどるという構成となっているが、分析の中心はあくまでプエブロ・インディアンが暮らす土地がアメリカ合衆国領に組み込まれた19世紀の半ばから現代にいたる期間である。筆者はこの期間を、プエブロ土器が通信販売で商品化され、また鉄道の開通によって南西部への観光が盛んになり、土器の土産物としての需要が高まった1870年代から1910年代(第I部)、「伝統」と「真正性」を重視するプエブロ土器の品質改良運動によって土器の新たなマーケットが成立し、そのことと連動して土器製作に関して本来は異なる伝統をもっていたプエブロ諸部族の間に汎プエブロ的な土器が生み出されるようになった1900年代から1970年代(第II部)、そして外部の教育機関で美術教育を受け、外部のアート・マーケットとも積極的に関わるようになった作家たちによって、より革新的な土器がファイン・アートとして製作されるようになった1980年代から2000年代(第III部)という3つに分けて分析している。しかしそこに書かれている、部族による土器製作の伝統の違い、各先住民作家のプロフィール、それぞれが作る土器の特徴、それを商品やアートとして販売しようとする外部の商人、土器製作の改良に関与する研究者、そしてそれらの人々に対する作家側の対応、外部の教育機関における先住民に対する美術教育の実態、現地調査の際に実施された作家たちへの聞き取りによって明らかにされる「伝統」やアイデンティティへの認識の違いなど、膨大で、網羅的な情報を小欄で手短かに紹介することには無理がある。

それゆえ、プエブロ土器に興味がある読者、あるいはアメリカ先住民の文化継承や文化復興に関心のある読者は、ぜひ本書を手に取り、実際に筆者が提示する先住民文化史のダイナミズムに触れてみてほしい。植民地化に抗する際に「文化」や「伝統」が戦略として被征服者によってどのように活用されるのか、その興味深い事例に出会うはずである。

佐藤 円 (大妻女子大学)

藤木剛康 著

『ポスト冷戦期アメリカの通商政策  
——自由貿易論と公正貿易論をめぐる対立』  
(ミネルヴァ書房, 2017年, 6,480円)

本書は1990年代以降のポスト冷戦期であるアメリカの通商覇権に関して、対外的側面と対内的側面のいずれにも偏ることなく分析した研究書である。構成は、大きく分けてI部クリントン政権期、II部G.W.ブッシュ政権、III部オバマ政権期の通商政策の三部から成り、章別には序章、第1章～第10章、終章から成る。序章では通商覇権に関する理論、分析視角が提示されている。

興味深い点は、ポスト冷戦期は自由貿易論と公正貿易論の理念対立が特徴的であり、この対立が国内政治決定過程で激化していった時期であるという分析である。著者は、経済的自由主義によって保守主義勢力が市場介入しようとする共和党と、政府の市場介入によりリベラルな価値観を追求しようとする民主党の政党間対立が1990年代半ばに激しくなる中、通商政策においては自由貿易論と公正貿易論の対立が激化し、このことが通商政策形成プロセスの停滞を断続的にもたらしたとする。アメリカでは過去20～30年間に製造業衰退、雇用損失が起こったが、このような事態に対して保守主義勢力が市場介入や財政支出拡大に反対であるため国内政策として労働者の教育・再訓練、失業対策といった社会政策の拡充が図られず、一方、リベラルは衰退、損失の対策を通商政策に求め、自由貿易の進行に歯止めをかけるべく、貿易相手国の労働、環境といった非貿易的関心事項を含む多様な事項を取上げて問題にする「公正貿易論」を展開した。

著者は今後のアメリカの通商覇権の行方に関して終章で見解を提示しており、自由貿易論と公正貿易論の対立が続き、通商政策に関する超党派での一致がなされないならば、アメリカは新たな貿易自由化の政策に踏み出せないことを示唆している。さらに、ポスト冷戦期では従前の覇権安定論で強調されたGDPや貿易量の優位性ではなく、メガFTAでの新たな貿易ルール(サプライチェーン貿易促進のためのサービス、投資の自由化、規制・政策の透明性、調和化)に重きが置かれるようになっていくことについて、このルールがこの先、果たして有効であるかを疑問視し、アメリカの通商覇権回復は、今後、貿易交渉国の合意を得られるような構想をアメリカが今後生み出すことができるのかにかかっているとしている。

本書は1990年代以降のアメリカ通商政策が行き詰っている様相や背景、及びアメリカの今後の通商覇権について詳述しており、公正貿易論の解釈、説明は、昨今のアメリカ通商政策において労働、環境の事項が重要論点となっている状況を理解する手助けとなる。

小山久美子(長崎大学)

谷口明丈・須藤 功 編

『現代アメリカ経済史——「問題大国」の出現』  
(有斐閣, 2017年, 4,104円)

「問題大国の出現」という大胆な副題が付された本書は、17名の専門家の手による総ページ数500ページを上回る大著である。4部17章からなり、第1部「経済と経済政策」、第2部「金融市場と金融政策」、第3部「企業と経営」、第4部「社会保障・労働と経済思想」という構成になっている。本書の関心は1980年代以降の所得格差の拡大にあり、各領域の歴史的展開を通じてそれが分析されている。なかには、政治的分極化、経済成長理論や生産性の問題を扱う章もある。

発想から5年を経過して上梓されたというだけあり、数回の研究会をへて各著者が編者の意図を理解したうえで執筆したことが窺える。各章の基本的な枠組みは、ニューディール期以前における制度やルールの形成、1980、90年代における変質を経て2007～08年の金融危機前後までの歴史を描くものとなっている。もっとも、編者の谷口氏が指摘するように、ニューディールが画期的であるとはいえ、反トラスト政策は19世紀後半から始まり、20世紀初頭の革新主義の時代にも本書が問題と指摘する事柄に対する処方箋が書かれていた。とはいえ、ニューディールがアメリカ史の転換点であることは否定できない。

評者としてはとりわけ、金融という視点で金融危機までを紡ぐ第2部を楽しく読ませてもらった。第8章では、FRBが改革を志向しながらも、それが「政府内の独立性」を主張したにとどまり、ガバナンスの変更は金融危機になってようやく漸進したとする。

また、ニューディールの金融規制のもとで第二次大戦後、家計の金融資産が膨張し、機関投資家は、株価をはじめ企業経営を左右する存在となった。これが第9章で扱われる「ファンド資本主義」である。しかし、ファンドも19世紀には存在し、1920年代の株価上昇の大きな力となった。ファンドはニューディール期に縮小したが、1980年代の規制緩和後の証券化を通じて再びその役割は拡大し、金融危機に至った。この点はFRBではなく、証券取引委員会(SEC)の不十分な規制が金融危機の原因という識者の指摘と符合する。

そして、サブプライム・ローンという低所得者向け金融は、金融危機の端緒となった。第10章は、その起源ともいえるローン・シャークからフリンジ・バンキングに焦点を当てている。そもそも、金融自由化の恩恵が低所得者層に及ばず、彼らの金融アクセスの困難さが指摘されている。金融とは信用(クレジット)であり、これがまさしく格差なのである。こうして、本書の問題意識である格差への架橋構造が図られている。

加藤一誠(慶應義塾大学)

## 第 53 回年次大会企画・報告募集のお知らせ

アメリカ学会第 53 回年次大会は、2019 年 6 月に法政大学にて開催の予定です。大会での自由論題報告と部会企画提案を以下の通り募集します。会員のみならずからの積極的な応募をお待ちしております。すべての応募は年次大会企画委員会 (program@jaas.gr.jp) 宛に、1~3 のうち該当する件名を明記し、それぞれの締切日厳守でお申し込みください。

### 1. 「自由論題報告申し込み」(締切日: 11 月 20 日)

報告テーマ、1,500 字程度の要旨、およびキーワード 5 つを記載。自由論題での報告は、海外在住の場合(下を参照)を除き、会員に限られます。非会員による申し込みは、締め切り日までに入会手続きを行っている場合のみ、応募内容を暫定的に受理し、入会が認められた時点で正式に審査対象とします。

<海外在住の非会員> 海外在住の方(国籍を問わない)は、非会員のままで自由論題での発表が 1 回のみ可能です。ただし、報告が決定した場合は、2019 年 3 月 1 日までに大会参加費(12,000 円・懇親会費を含む)の支払いが必要となります。大会参加費は返金不可となっておりますのでご了承ください。

報告者には 2019 年 5 月 15 日までにペーパー(和文の場合、8,000 字~12,000 字、英文の場合、5,000~7,500 words 程度)を提出していただき、学会ホームページに掲載します。会員にはパスワードを通知し、年次大会の前夜 2 週間のみペーパーを掲載します。なお、報告内容は未発表のものとし、応募者多数の場合は要旨に基づく選考を行うことがあります。また、英語での報告の場合は、要旨・タイトルは英語としてください。

### 2. 「部会の企画提案」(締切日: 9 月 6 日)

部会のテーマおよび 800 字程度の要旨。報告者案があれば合わせてご提案ください。部会の企画に関しては、以下の申しあわせ事項にご留意ください。第 51・52 回大会の部会・シンポジウム・ワークショップでの報告者は、第 53 回大会の部会では報告できません。司会者、討論者としての応募も原則避けてください。登壇者の過半数は会員であることとします。司会者には大会までの連絡調整などをお願いするため、原則会員としてください。非会員の部会登壇者に対して、学会から謝金・交通費などは支払われませんので、ご了承ください。また、登壇者の構成については、ジェンダーや地域の多様性に配慮して下さい。学際性のある企画を歓迎しますが、必ずしもそれを採択の条件とはいたしません。

### 3. 「分科会開催申し込み」(締切日: 8 月 31 日)

新規の場合は、分科会趣旨(400 字以内)と、連絡責任者および賛同者 5 名の氏名をお知らせ下さい。継続の場合にも、分科会責任者氏名を添えて、継続する旨をご連絡ください。

なお、全ての企画内容の最終決定は、年次大会企画委員会の提案に基づいて常務理事会で行います。応募された内容に関して調整をさせていただく場合があることを、あらかじめご了解ください。

年次大会企画委員会

## 『アメリカ研究』第 53 号「特集論文」募集のお知らせ

『アメリカ研究』第 53 号の特集テーマは「ヨーロッパとアメリカ」の趣旨は以下の通りです。

『アメリカ研究』第 53 号は、「ヨーロッパとアメリカ」をテーマとして論文を募集します。

アメリカ学会の創設者の一人である故齋藤眞先生は、常々、日本におけるアメリカ研究は比較研究であると説いてきました。しかしながら、アメリカ研究が発展し、資料の発掘が進み、また、すぐれた研究が蓄積されてきたことなどの理由により、「比較」の視点は失われつつあるようにみえます。アメリカ合衆国において、近年、「trans」とか「global」と冠せられた研究が盛んになっていることは、それまで、アメリカの「外部」に視点をもたずにアメリカ研究がおこなわれてきたことへの反省が込められているのだらうと思います。この動向は、アメリカ合衆国が、「帝国」、「アメリカの世紀」、「アメリカニゼーション」、あるいは、「アメリカ例外主義」や「アメリカ第一主義」という言葉で語られる事態を世界で現出させ、そこでさまざまな弊害・摩擦・対立が生まれていることへの一誤解をおそれずにいうならば、アメリカ合衆国が「問題的存在」となっていることへの一批判的な態度と結びついているのではないのでしょうか。

われわれ、日本に住むアメリカ研究者も、「世界におけるアメリカ合衆国」という現象について、記述的であれ、規範的であれ、その有様を描き直すために、自分たちの視点を反省的に再構築する必要があるでしょうし、それゆえ、「外部」の視点からアメリカ合衆国を考察することが求められているように思います。

その際、その視点の置き場所を日本に求めることもできます。しかし、アメリカ研究においても、現実の日米関係においても、アメリカとの距離をとることがむずかしくなっている日本においては、「アメリカを考察する日本」そのものを対象化する視点を築くことがむしろ必要ではないのでしょうか。そこで、『アメリカ研究』第 53 号では、意識的にせよ、無意識的にせよ、「アメリカを考察する日本」への視線を向けることになるであろう視座としてヨーロッパを選び、「ヨーロッパとアメリカ」を「特集」のテーマとしました。

すでに「環大西洋関係」という視点から、James T. Kloppenberg, *Uncertain Victory*, Daniel T. Rodgers, *Atlantic Crossings* など、アメリカ合衆国とヨーロッパとの政治的・文化的・経済的接触を考察した研究は重ねられてきています。また、文化事象に目を向ければ、植民地時代以来、大西洋の両岸を往来した文化的な交渉はもろろんのこと、アメリカに生まれ、ヨーロッパを意識した作家や芸術家の文化的活動は枚挙に遑がありません。現代文化史においては、20 世紀にヨー

ロッパに魅せられ、文化的亡命者として欧州に渡った知識人や芸術家の活動、二つの大戦の戦場となり疲弊したヨーロッパから、文化芸術の中心地がアメリカに移ったことによりアメリカに流入した芸術家の活動、いずれも「環大西洋関係」を文化の側から照射するものであり、こうした活動の考察も、今、あらためて米欧の関係を現在進行形で読み解こうとする際に、多くの示唆を与えてくれることになると考えます。本号では、こうした研究から得られた知見を踏まえつつも、「比較」の視点からアメリカ合衆国の特質を論じる論考の応募を期待しています。

\*「特集」に応募希望の会員は、2018年6月末日までに、氏名・所属・論文題目および構構・資料などの説明（400字程度）を電子メール（nenpo@jaas.gr.jp）で、年報編集委員会宛てにお申し込み下さい。その際のタイトルは「『アメリカ研究』特集応募」と明記してください。執筆要項は学会ウェブサイト参照のこと。  
[http://www.jaas.gr.jp/journal\\_guide.html](http://www.jaas.gr.jp/journal_guide.html) 原稿締め切りは2018年9月25日（火）

年報編集委員会

---

### 『アメリカ研究』第53号「自由投稿論文」募集のお知らせ

学会機関誌『アメリカ研究』（年報）は2019年3月に第53号を刊行する予定です。会員諸氏の積極的な投稿をお待ちしています。

1. 内容 アメリカ研究に関する未発表論文。前年度『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文が掲載された方は、本年度の投稿をご遠慮ください。また、同じ年度に、あるいは年度をまたいで『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することはできません。これはなるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。
2. 枚数 論文は33字×34行のレイアウトで19ページ以内（註を含む）。執筆要項は学会ウェブサイト参照のこと。  
[http://www.jaas.gr.jp/journal\\_guide.html](http://www.jaas.gr.jp/journal_guide.html)
3. 原稿締め切り 2018年9月25日（火）
4. 提出 電子メールで年報編集委員会宛て（nenpo@jaas.gr.jp）にお送りください。

\*投稿希望者は、論文題目を2018年6月末日までに電子メールで、年報編集委員会宛て（nenpo@jaas.gr.jp）にお申込みください。

年報編集委員会

---

### 日米友好基金による旅費・滞在費補助金の受給者について 2018年OAH大会

2018年4月にサクラメントで開催予定のOAH年次大会に参加する、米国留学中の旅費・滞在費受給者は、以下の3名に決まりました。

西岡みなみ (University of Tennessee Knoxville)  
福西恵子 (University of Hawaii)  
山田優理 (University of California, Los Angeles)

おめでとうございます。

国際委員会

---

### Organization of American Historians 派遣来日研究者のお知らせ

2018年度のOAH/JAAS Short Residency Programによる派遣研究者が次の2名に決まりました。

このプログラムはアメリカ史を中心に、日本の大学院生、学部学生の指導と研究者の相互交流を目的とするもので、研究者は各大学に約2週間滞在します。研究者の専門領域、受け入れ校と担当者、滞在期間は以下の通りです。これらの研究者を招いて講演会や研究会を開催ご希望の方は、できるだけ早い時期に受け入れ校の担当者と直接交渉し、この機会を有効にご利用ください。

Katherine Benton-Cohen (Georgetown University)  
専門領域：Immigration and Women's History

受け入れ校／担当者：中央大学／小田悠生会員 一政（野村）史織会員  
滞在期間：2018年5月29日から6月11日まで

Bethel Saler (Haverford College)

専門領域：History of the Early Republic

受け入れ校／担当者：福岡大学／森丈夫会員

滞在期間：2018年6月1日から14日まで

なお、このプログラムが2019年度も実施される場合、受け入れ校となることを希望される会員は2018年5月20日までに国際委員会 (international@jaas.gr.jp) までご連絡ください。

国際委員会

~~~~~

## アメリカ学会海外渡航奨励金 — 国外の学会やシンポジウムで発表する方を対象とする助成制度のご案内 —

このたびアメリカ学会では、国外での学会やシンポジウムにて発表する方を対象に、以下の要領で渡航奨励金を支給することになりました。本制度による給付を希望する方は積極的にご応募ください。

### 1. 応募資格：

- ① アメリカ学会の会員であること。
- ② 国際学会やシンポジウムでの発表時に、日本に在住し、日本からの旅費を要すること。
- ③ 発表内容がアメリカ研究に関するものであること。
- ④ 大学院生等の若手研究者を優先的に検討し、そのほか、助成の必要性、発表の内容を総合的に判断する。

### 2. 審査基準：

- ① 大学院生等の若手研究者を優先する。大学院生については発表をしない場合も応募可能。
- ② American Studies Association, American Studies Association of Korea, Organization of American Historians のいずれかの年次大会で発表する方を優先するが、これら以外の国際学会やシンポジウムで発表する場合も応募できる。
- ③ 他組織からの援助のないものを原則として優先する。
- ④ そのほか、助成の必要性、発表の内容を総合的に判断する。

### 3. 応募方法、結果発表、発表後の提出書類

- ① 次の書類を6月16日から30日までの期間に、国際委員会 (international@jaas.gr.jp) 宛に送ること。応募メールの件名を「JAAS 海外渡航奨励金応募」と明記すること。
  - (1) 履歴書
  - (2) 業績書
  - (3) 発表が受け入れられたことを証明する文書（電子メール可）
  - (4) 発表のタイトルと要旨（英語で250-300語程度とする）
  - (5) (ASA, ASAK, OAH) 以外での発表の場合のみ) 当該国際学会やシンポジウムに関する情報（目的、歴史、規模等、字数は指定しないが、簡潔で正確であること）
  - (6) 理由書（奨励金を必要とする理由。他組織からの援助のないものを原則として優先するので、申請時にほかの組織による援助を申請中か、あるいは援助を受けることが決定した者は、その旨明記すること。ほかの組織による援助のなかには、所属機関の研究費を充当する予定も含む。なお、旅費・宿泊費（実費）の不足部分に限り、他の補助金との併用が認められる。）
- ② 審査結果は、7月中に通知し、学会HPで公表する。
- ③ 発表終了後に報告書（邦語1200字程度あるいは英語500語程度とする）および領収書の原本（旅費・宿泊費）を提出すること。

### 4. 支給額

アジア圏の場合は一人5万円、アジア圏外の場合は一人15万円を原則とする。

国際委員会 (international@jaas.gr.jp)

## アメリカ学会常務理事会よりのお知らせ

アメリカ学会では、運営および活動についていくつかの変更を行いました。一部再掲となりますが、会員のみならず、ご確認ください。全体として、本学会による社会への発信・貢献を強めること、年次大会での報告者の国際化・多様化を促進すること、ならびに若手会員を増やすことを目指しています。

### (1) 年報の市販化

年報『アメリカ研究』の編集・刊行を木鐸社に変更し、それにともない、2018年春刊行の年報より市販化することになりました。市販化に際して、従来の「特集論文」「自由投稿論文」に加えて、会員による座談会を掲載いたします。新企画の第一回目として、「トランプ政権下のアメリカ」をテーマに取り上げました。久保文明会員・巽孝之会員・森本あんり会員による鼎談です。

### (2) 会員資格の変更

- ①海外在住の非会員が自由論題に参加できるようになりました。
- ②大学院生会員の身分は10年間継続となりました。
- ③修士1年から入会可能となりました。

常務理事会

### 新入会員（2018年2月27日現在）

|                    |           |       |
|--------------------|-----------|-------|
| 吉本秀子               | 山口県立大学    | 政 日 史 |
| 西岡かれん              | 京都大学（院）   | 文 芸 衆 |
| 羽場百合愛              | 津田塾大学（院）  | ジ 文   |
| 池田直樹               | 神戸大学（院）   | 社 宗 化 |
| Bottorff, Bruce P. | 関西外国語大学   | 社 史 ジ |
| 平野真理子              | 大阪女学院短期大学 | 文 民 化 |
| 萩野智美               | 立正大学      | 文 化 ジ |
| 山本全翻               | なし        | 日 外 政 |
| 飯野友幸               | 上智大学      | 文 芸   |
| Cardi, Luciana     | 大阪大学      | 文     |
| 宮田智之               | 帝京大学      | 政 外 日 |
| 西岡みなみ              | テネシー大学（院） | 史 宗 社 |
| 田浦紘一郎              | 成蹊大学（院）   | 文 化 環 |
| 五十嵐舞               | 一橋大学（院）   | ジ 文 思 |
| 舟津奈緒子              | 日本国際問題研究所 | 日 外 政 |
| 山脇岳志               | 朝日新聞社     | 日 政 外 |
| (株)プロクエスト          | 維持会員      |       |

(\*入会申し込み順、専門領域の略記については、PDF版会員名簿作成用アンケートおよび学会ホームページに記載されている新表記法による)

### 編 集 後 記

今年度、初めて年報編集委員会の仕事に携わせていただくことになりました。不慣れなことが多くてご迷惑をおかけしていますが、外交史ばかり勉強してきた私が、普段はほとんど接する機会がない文学や思想といった分野の先生方とご一緒させていただく貴重な機会をいただい

ています。編集会議は毎回、分野の垣根を超えて学ぶことの重要性を痛感するとともに、それを「言うは易し、行は難し」なことを実感する場となっています。

(青野利彦)

2018年4月15日 発行  
アメリカ学会  
〒231-0023 横浜市中区山下町 194-502  
学協会サポートセンター内  
Tel: 045-671-1525 Fax: 045-671-1935  
http://www.jaas.gr.jp

発行人 久保文明  
編集人 中野勝郎  
印刷所 啓文堂松本印刷  
〒162-0041 新宿区早稲田鶴巻町 565-12